

目的 古来脛部に着装する服物の總称として脛巾(ハバキ)の語が使われ、室町時代から脚巾、脚絆、脚半の語が出たが当時はこれらをハバキと呼んだ。しかし後に地域によりハバキは植物莖葉で編織したもの、キヤハンは麻、木綿、絹織物などの布帛を材料としたものに分けて呼ぶ所も出てきた。山形県では一般にハバキは蒲、藁、藁の植物莖葉を材料としたもの、またそれに木綿の裂片を編みこんだものなどを指し、キヤハンは布帛で作られたものとしている。そこで民具として伝承されてきたキヤハンの種類のなかから特に土質が硬く耕作には柄と刃の角度の小さい平鋤を使わなければならない山形県北村山郡で着装されているキヤハンの数例をあげ、作業に適応した形態を考察し、民具として残存している形態的機能の意味を探らうとするものである。

方法 ①県内収集物を分類考察 ②他県の物との比較 ③農具との関連調査 ④作業動作(足首位最大背屈 15° 、最大低屈 65°)における下腿寸法の変化の測定 ⑤足首位における脚絆の荷重量の測定 などの総合結果より考察。

結果 山形県の脚絆の形態は①巻脚絆 足マキと呼ばれるゲートル形式のもの ②通称大津脚絆 山形では平脚絆と呼ばれる方形の紐巻のもの ③江戸脚絆といわれるコハゼ付脚絆で腓腹筋の動きを処理する二布構成のもの ④筒脚絆などがある。北郡では江戸脚絆型で足首位置の形は直線、凹形、凸形である。そこで農作業時の運動による下腿寸法の変化、荷重量を測定検討した結果、凸形が動作、履物との関連で機能であった。民俗服飾には効率を志向し変化してゆくプロセス的資料が残存し、その時々々の生活技術が察知される。